

極真への道を読んで

日置 正恵

この本を大山総裁が書かれたのは、1976年、改訂版が出版されたのは1981年です。序文にて総裁は、『日本の経済的な成長は、欧米世界のほとんどリーダー的な位置を占めるまでに至っている。だが、この優勢はいつまで続くかわからない。アメリカなみの個人主義、自由主義が根づいてしまい、今の若い世代あたりから、日本人の団結心がひどく落ちてきており、相互連帯のモラルが著しく低下してきている。』とおっしゃっています。

その後、日本はバブル景気で経済繁栄のピークを迎え、日本人の多くが「自分たちは超一流国の国民である。」などと錯覚し、勝手気儘な振舞いを謳歌した挙げ句バブルは崩壊し、地価や株価の大幅下落、相次ぐ企業の倒産、失業、就職難、デフレスパイラル、自殺者の増加等々、かつての時代からは想像もできないような低迷ぶりです。さらに、先の震災後の姿では、ガレキ処理の問題でも明らかなように、被災地以外の国民は人の痛みをわかれようともせず、自分さえ良ければいいというエゴイズムをさらけ出す始末です。

このような現代の日本の状態を見ると、いかに総裁に先見の明があったかわかります。アメリカの上辺の都合の良い所ばかりを真似て節度を失い、礼節を軽んじ、ついには『自己責任』などと他者を思いやる心を忘れてしまった今の日本の姿は、総裁の懸念がズバリ的中して最悪な事態となってしまいました。政治家、企業家といった国のリーダー層までもが、国家を顧みず外国に媚び、拝金主義に陥り、多くの国民が苦難を強いられています。まさに『志立たざれば、舵なき舟、銜なき馬の如し』です。

総裁が憂いた当時の『今の若い世代』とは紛れもなく私の世代です。振り返ると、当時高校生であった私は何の目標も無く、将来のこともただ漠然としか考えず、学校の先生や周りの大人の人達から「将来は何をしたい？」と聞かれても「わからない」と答えるだけの無気力な少年でした。幼い頃から借力・空手を修行し読書に励み、少年時代に『将来のビスマルクたらん』と志を抱いた総裁とは大きくかけ離れた恥ずかしい姿です。現在の日本国を廃退させてしまった世代の一人として申し訳なく思う次第です。

さて、今後この日本を立て直していくために何をすればよいかですが、人それぞれ取組み方は置かれた立場や環境で変わるのかもしれませんが、しかし幸いなことに、我々は極真会館の門下生です。総裁の設立された極真会館は単なる格闘技術の指南所ではなく、人間教育・人財育成に重きをおいていることが本書を読ませていただき、よくわかりました。総裁が若き日に抱いた志に基き、門下生は空手の修練に励むことを通じて礼節を知り、慈愛を知り、自らの志を立てることが出来ます。

私もこれからより一層、道場の空気を通して、総裁の遺された志を肌身に感じつつ、他の道場生の方たちと励まし合い助け合いながら、空手修行に勤しみ、自己を鍛錬し、次代を担う少年・少女の道場生の育成に微力ながらお手伝いさせていただき、志ある人財を少しでも多く世に増やすことで、国民の品格を底上げし、日本国の再生に寄与していきたいと存じる次第であります。

押忍。

黒帯になれたら

日置 正恵

私が極真空手に興味を抱いたのは中学生の時、梶原一輝先生原作の『四角いジャングル』を

読んだのがきっかけでした。当作では、大山総裁率いる極真会館の活躍が随所に描かれていましたが、全日本王者で世界大会も制し、当時空手界のトップに君臨していた中村誠師範が、百人組手で大苦戦を強いられる場面は、衝撃的であり感動的でもありました。「こんなに強い人でも思い通りにいかないこともあるんだ。」ということを知りました。万事が成功のもとに終わるフィクションの世界のヒーローとは違う、苦しみ抜いて栄冠を掴み取る、真の王者の姿がそこにありました。やがて、第四回世界大会で華麗に力強く勝利を重ねる松井館長をテレビで観戦し、更に極真空手への思いを募らせていき、三十一歳の時、タウンページで近所に極真空手の道場があることを知り、見学に行きました。

見学で訪れた旧天理道場では、実に激しい稽古が繰り広げられていました。指導員の梶原先生のご指導の下、百本単位の基本稽古、補強は腕立て伏せや腹筋運動に加えて、上半身だけの匍匐前進等バラエティに富み、背中合せ座位から互いに背中を取り合い、負けたらジャンピングスクワット五十本で勝つまで抜けられないゲーム形式の稽古では、途中で嘔吐する道場生の方もおられます。ミット打ちでは、白帯の方でも振動で建物が揺れる程の突き・蹴りを打ち込まれ、最後のスパーリングでは、激しい攻撃に相手の膝が崩れるくらいのガチンコ組手が展開されます。まさに『四角いジャングル』で垣間見た極真空手の猛稽古が目前にありました。本物を目の当たりにした私は、その場で梶原先生・尾身先輩に入門をお願いしました。

入門後、私は極真会館の意外な一面を知ることになります。これまで猛稽古と厳しい規律、そして実践主義の『地上最強のカラテ』という強面の側面しか認識できていませんでしたが、兎に角、道場の方々が黒帯の先生方から色帯・白帯の先輩方まで、すべて親切で温かい方ばかりであるということです。入門して稽古参加の初日には、緑帯の先輩が帯の結び方から丁寧に教えてくださいます。入門から一カ月以上は、上級帯の先輩がご自身の稽古時間を削ってまでも、基本からミット打ちまで付きっきりでご指導くださいました。ミット蹴りでは、「足指を痛めないように、中足をしっかり返しましょうね。」と優しくアドバイスをくださいます。厳しい稽古の後には、何人かの方が「いつもこんなにしんどい稽古の日ばかりではないから、また練習に来てくださいね。」と声をかけてくださいます。また、稽古の後に、道場の先輩のご自宅にお招きいただき食事をよばれ、空手や総合格闘技のビデオを鑑賞させていただいたことも何度かありました。

天理支部道場ができてからは、伊藤先生や丹羽先輩、観世先生や指導員の裕原さんをはじめ、多くの道場関係者の方々にお世話になってきました。十六年もの間、空手を続けてこられたのも、多くの方々に温かく支えていただいたからに他なりません。極真会館奈良支部は、本当に強くて温かくて優しい素晴らしい組織です。このような組織を築き上げ、空手道修練の機会を与えてくださった秦師範に心から感謝申し上げます。

さて、私は今日まで多くの方々から温かいご支援をいただき、空手を続けてきたわけですが、黒帯取得を目指すにあたって、これからは今までいただいていた御恩を少しずつでもお返ししていきたいと存じます。極真空手に興味を持たれて見学に来られた方を、しっかりとご案内して入門していただくこと。入門以来、私が先生や先輩方にしていただいたように、入門された方が道場に慣れ親しんで、稽古に励めるよう、また上級帯を取得できるようサポートしていくこと。これまで裕原さんお一人に何かと負担をおかけしてきたので、早く黒帯になってお手伝いしていくこと。そして、長い間ろくに昇級もせずにご心配、ご迷惑ばかりかけてしまったにもかかわらず、温かく見守り続けて、今回の昇段審査受審にまで導いてくださり、受審が決まってからは、審査に向けて懇切丁寧に指導くださった伊藤先生に、早く一人前の指導員になって、道場生育成のお手伝いをさせていただき、恩返しをしたいです。

先日、秦師範にお忙しい中貴重なお時間を割いていただき、昇段審査受審にあたって多くのアドバイスを頂戴しました。その中で『黒帯になったときからが本当のスタート地点に立つ。』

ということや、『あれができない、これができない。だからまだ挑戦できない。』ではなく、『まず踏み出して、それから足りないものは補っていく。』という姿勢で成功した人もいることを教えていただきました。昇段審査受審にまだ『迷い』がありましたが、アドバイスをいただいたおかげで勇気が湧きました。黒帯になれば、そこからがスタートであることを忘れず、技術、体力、知識、経験といったことを、稽古や試合を通じてしっかりと自分のものにしていき、また後輩の道場生の方たちへ伝えていきたいと思います。そして、極真会館奈良支部の更なる活性化と発展のために、微力ながらもお役に立ちたいと存じます。押忍。